



# 師匠の 辞書

川崎ゆきお

「人は何を頼りに生きておるのだろう」

「頭の中に辞書があるんでしょ」

「みんなナポレオンか」

「辞書にないものは、新しく辞書に書き加えられるのですよ」

「辞書はデータのようなものか」

「ライブラリーですよ。ひな形なんかも入っているんでしょねえ」

「その人オリジナルのか」

「さあ、既製品じゃないですか。使い回しのいいのが残ったりします」

「ことわざ名言辞書もか」

「はい」

「しかし、同じ事柄でも、悪く受け取ったり良く言ったりするじゃないか。あれは矛盾しておるぞ。辞書など役に立たんじゃないか。どちらでもいいのなら」

「ああ、だから、選ぶのですよ。そしてよく選ぶ辞書をブックマークして、お気に入りにするのです。いずれもコピーですからね、自分で作った辞書じゃないので、いくらでも入ります」

「自分で考えついた辞書はないのか」

「あるでしょうねえ。経験に基づいて」

「その辞書こそが正しいのでは」

「いや、一人の人間が経験することなんて僅かですし、何かの偶然でそうなたただけの話かもしれませんから、ローカルなものです。だから経験だけに頼るのはまずいですよ」

「なるほど」

「そういうことも含めて、解釈の仕方の違う辞書も加わるのです」

「え、今何と云った。分かりにくいぞ」

「だから、経験に頼ると、まずいですよと言うのも辞書に入っているのです」

「経験だけに頼るとまずいかどうかは何処で判断する」

「まあ、適当ですよ。何か当てはまらないなあ、って気付いたあたりからですかね」

「それは辞書にあるのか」

「気付くことができますか」

「そうじゃ」

「いや、辞書にはそこまで載っていないと思いますよ。ただ、そう言うこともあること程度は」

「分かりにくいぞ」

「これはおかしいぞと感じたのが、当たっていたり、勘違いだったり、よく分からないでしょ。実際には」

「そうじゃなあ、思い過ごしもある」

「そうでない場合あるでしょ」

「どっちじゃ」

「だから、それは辞書を繰る側の問題です。辞書は固定していますが、人はナマモノですからねえ」

「辞書に頼るのは良いのか、悪いのか」

「いや、そのままでも実際には頭の中の辞書を繰ってますよ。頼るも何も」

「では辞書の項目が多いほど有利か」

「あまり昔の言葉なんかを引用しても、通じないことが多いです。基本的なものだけで、いいんじゃないですか」

「辞書数が多いほど強いと思うが」

「使い方でしょうねえ。使う間合いや、タイミングです。より細やかな事柄や逆に大きな枠も言い表せますからね」

「じゃ、やはり辞書の繰り方にかかってくるのじゃな」

「そうかと」

「じゃ、辞書など当てにならんじゃないか」

「だから、そういう繰り方に関しての辞書も含まれているのですよ。やはり応用しないと駄目ですよ。師匠」

「辞書の繰り方の項目は何処に載っておる」

「それを推測するのが大事です」

「推測」

「思い巡らせば、何処かに書かれていますよ。それを引っ張り出せばいいのです」

「そうか」

「分かりましたか、師匠」

「ああ」

「じゃ、今日の伝授はこれぐらいで」

「明日もよろしくな」

師匠は頭を下げた。クーデターが起こっていたようだ。

了